

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：32682

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06659

研究課題名(和文)スペクトル音楽における新しいテクノロジーと創造性の関係の研究

研究課題名(英文)Research on the relation between new technology and creativity in spectral music

研究代表者

宮川 渉(Miyakawa, Wataru)

明治大学・情報コミュニケーション学部・特任講師

研究者番号：10760051

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、1970年代から現在に至るまでフランスを中心に現代音楽の多くの作曲家に多大な影響を与えているスペクトル音楽における新しいテクノロジーと創造性の関係を考察することを目的とした。国内外で資料収集を行なったことにより、多くの貴重な資料を入手し、それらが楽曲分析に取り組む上で大いに役立った。その結果、特にこれまで国内ではほとんど取り組まれたことがなかったスペクトル楽派第二世代の作曲家たちの作品研究を深めることができた。

研究成果の概要(英文)：This study analyzes the relation between new technology and creativity in spectral music which is an important movement in contemporary music from the 1970s, especially in France. By collecting documents in Japan and abroad, I could get many precious informations to undertake the analysis of this music. I could especially go into the research on Second generation of spectral music.

研究分野：音楽学

キーワード：音楽とテクノロジー 作曲 現代音楽 スペクトル音楽

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

スペクトル音楽の現代音楽史における重要性は、多くの音楽祭でその楽派の作品が演奏され、様々な研究対象となっていることが示すように、欧米圏では以前からすでに認められている。さらにフィンランド人作曲家カイヤ・サーリアホなどフランス国立音響音楽研究所 (IRCAM) で学んだ多国籍の作曲家の活躍により、この音楽の影響力は増大し、日本人作曲家の中でも、野平一郎、金子仁美、鈴木純明といった作曲家たちが、この音楽から強い影響を受けている。しかし、この楽派の重要性とは裏腹に、国内におけるこの音楽に関する本格的な研究は、ほぼ無に等しい状態である。またスペクトル音楽は、海外では既に複数の研究の対象になっているものの、マルク＝アンドレ・ダルバヴィ、フィリップ・ルルーといったスペクトル楽派第二世代に属する作曲家たちの作品研究は、海外でもまだあまり進んでいない。

### 2. 研究の目的

スペクトル音楽は、1970年代以降にジェラルド・グリゼーとトリスタン・ミュライユなどのフランス人の作曲家たちが中心となって、ある音のスペクトル分析などに基づいて作った音素材を用いることにより作曲することを提唱したことから始まった。このようなアプローチは、これらの作曲家たちに、IRCAMのような研究機関を通じて、音響学研究者やプログラマーなど、他の分野の研究者との共同作業を行なうことを必要とさせた。また、彼らが当初から、作曲のプロセス、もしくは作品の中に新しいテクノロジーの可能性を積極的に利用しようと試みたことも、このような研究機関との強いつながりをもたらす結果となった。そのため本研究の目的は、スペクトル音楽における新しいテクノロジーと創造性の関係

の特徴や問題点を具体的に明らかにすることである。

### 3. 研究の方法

本研究は、主に資料収集・分析と楽曲分析という二段階で進めた。

(1)資料収集においては主に二つの課題があった。第一にスペクトル音楽についての先行研究を調査し、本研究の位置づけを明確にすることである。そのため、スペクトル音楽が生まれ、現在もこの音楽における研究が最も進んでいると思われるフランス・パリでの調査が必要であった。パリでは、IRCAMを中心に資料収集を行なった。

第二の課題は、この楽派に属しているとみなされる作曲家、またはこの楽派と関連のある作曲家たちのできるだけ多くの作品を検証し、特にこの研究テーマに該当すると思われる作品を選択し、これらの作品に関する資料(楽譜、録音、文献、コンピュータ上のデータなど)を収集することである。

(2)(1)での調査結果から選択した楽曲の分析に取り組む。主にカイヤ・サーリアホ、マルク＝アンドレ・ダルバヴィ、フィリップ・ルルーといったスペクトル楽派第二世代の作曲家の作品が多かったが、グリゼーやミュライユなどのスペクトル音楽初期の作品分析も行なった。

### 4. 研究成果

本研究の主な成果は、以下の5点である。

#### (1)資料収集・分析

IRCAMを中心に行なった資料収集・分析では、国内だけでなく国外においても入手が難しい貴重な資料や情報を多く得ることができた。これらの中には絶版になった書籍や廃盤になったCDなどだけでなく、IRCAMの研究者たちから直接提供していただいたものも含む。例えば、IRCAMの「音

楽実践の分析」研究チームの音楽学者 Nicolas Donin は、フィリップ・ルルーのエレクトロニクスとアンサンブルのための *Voi(Rex)*(2002)を分析した結果を CD-ROM として発表したのだが、すでに廃盤となっているその CD-ROM を提供していただき、その時の研究方法などについての説明を受けることができた。また、これらの資料を分析することにより、コンピュータを用いて制作された作品の研究方法を学ぶこともできた。

#### (2)スペクトル音楽の定義

上記のように、主にスペクトル楽派第二世代の作曲家たちの作品研究に取り組んだが、しかし、スペクトル音楽を一体どのように定義できるか、その点を再検討することが第一の課題であった。そのためグリゼーやミュライユの作品だけでなく、ユッグ・デュフルやミカエル・レヴィナスなど、スペクトル楽派とみなされることが多い作曲家たちの作品研究にも取り組む必要があった。その研究結果からスペクトル音楽の作曲法は主にグリゼーとミュライユの考えに基づくものである、という結論に至った。

#### (3)スペクトル楽派第二世代の作品研究

スペクトル楽派第二世代の中でカイヤ・サーリアホ、マルク＝アンドレ・ダルバヴィ、フィリップ・ルルーの三人を選択し、スペクトル音楽の作曲法の影響とコンピュータの役割に焦点を当てて調査した。彼らを選択したのは、スペクトル音楽の作曲法からどのように新たな方法論を打ち出したかを調査する上で、それぞれが極めて独自なかたちのアプローチを取り入れているように思われたからである。

その結果、彼ら三人には当然のことながら相違点も見られたが、声楽への関心、プロセスの複雑化、モデルの多様化など、幾つかの共通点を見出すことができた。

さらにこれらの作曲家以外にもフランス人フィリップ・ユレル、ジャン＝リュック・エルヴェ、ファビアン・レヴィ、イタリア人ファウスト・ロミテリ、フィンランド人マグヌス・リンドベルイ、アメリカ人ジョシュア・ファインバーグなどのスペクトル楽派第二世代とみなされる作曲家たちの作品にもできるだけ多く目を通すように努めた。その過程で 2000 年代以降には、北米やポーランドの現代音楽においてスペクトル楽派の影響を受けた作曲家たちの新たな流れも生まれていたことがわかった。

これらスペクトル楽派第二世代の作曲家たちのあえて異質で矛盾さえする様々な要素をひとつの曲の中に積極的に取り入れる姿勢がスペクトル音楽創始者たちとの決定的な違いであることが理解できた。

#### (4)スペクトル音楽の作曲法と黛敏郎のカンパノロジーエフェクトの比較研究

またスペクトル音楽の作曲法と日本人作曲家黛敏郎のカンパノロジーエフェクトの比較研究に取り組んだ。この研究において、黛の梵鐘の音響分析結果から素材を抽出するカンパノロジーエフェクトという方法論は、スペクトル楽派のものと共通点を持つにも拘らず、なぜスペクトル楽派のように発展せず個人レベルにとどまったのかを検証した。この研究を進める上で日本近代音楽館に保存されている黛のスケッチにも目を通すことにより、黛が具体的にどのようなかたちでカンパノロジーエフェクトという方法論を構築したのかが理解できた。

一方でスペクトル楽派のミュライユのオーケストラのための『ゴンドワナ』(1980)やジョナサン・ハーヴェイのテープ音楽 *Mortuos plango, vivos voco* (1980) など、鐘の音響分析結果を取り入れた作品を分析することにより、黛のカンパノロジーエフェクトとの相違点を見出すことができた。

この研究はもとより予定していた研究課題ではなかったが、これまで研究代表者が取り組んできた武満徹や細川俊夫といった日本人作曲家の研究にも関わるものであり、今後この研究をさらに深めていきたい。

これらの研究を通じて広いかたちでスペクトル音楽の理解を深めることができたのが、本研究の最大の成果だったと考えられる。

#### (5)研究成果の発表

本研究の成果発表は、明らかに十分と言えるものではない。研究期間が短かったことだけでなく、研究代表者が本研究と同時に取り組んでいる『武満徹著作集』全5巻より抜粋540頁をフランス語に翻訳するというプロジェクトを出版社との関係からこの期間中に大幅に進める必要があったからである。

研究期間は終了したものの現在スペクトル楽派第二世代に関する論文を書き上げ、学会に投稿する予定であり、これからも研究成果の発表に積極的に取り組みたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

宮川 渉 (2016). 新しい音楽の探求. 季刊広報誌『明治』, 70号, pp. 34-35. 査読無.

〔学会発表〕(計 1 件)

Miyakawa, W. (2017). Comparison of Toshiro Mayuzumi's "Campanology Effect" and the Compositional Approach of Spectral Music. 第20回国際音楽学会東京大会(IMS

2017 Tokyo), 2017年3月23日, 東京藝術大学.

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

宮川 渉 (Miyakawa Wataru)

明治大学情報コミュニケーション学部・特任講師

研究者番号: 10760051